



リエル・サーストン (Riel "Seraph" Thurston)

西園寺 真之



控え目に流されるチャイコフスキーの「花のワルツ」で満たされた、『慈善パーティ』会場。

『わたし』は、その三拍子のリズムに乗るようにして、滑らかに歩を進める。ツンと僅かに顎を上げ、爪先から接地するお上品なステップ。

「状況は？」

「シニヨンの中に隠した骨伝導マイクが、馴染みと違う声色を伝えてくる。

「問題あるわけじゃないじゃない」

「馬子にも衣装、ってか」

「……黙らないとその口を縫い合わせるわよ」

「ほう、お嬢様に裁縫がお出来になるとは初耳だ」

「訂正するわ」

遠目にはリルケの詩集でも暗唱してるような優雅な唇の動きで、あたしは宣告する。

「あなたの尻の穴を溶接して、代わりに尻穴を額の真ん中に作ってやる」

「ゴメンナサイ」

減らず口を黙らせたそのタイミングで、『標的』がその姿を現した。

1  
銀髪をオールバックに決め、長身にスリーピースを一分の隙もなく着こなした紳士。聖職者よろしく掛けたストラ

が嫌味なくらい決まっっていて、周囲の人間達とは「別格」であることを言外に主張している。付かず離れずの位置で影のように控える、ダークスーツにサンングラスの男が二人。  
(標的確認)

骨伝導マイクにだけ聞こえるように囁くと、『わたし』は『標的』に歩み寄る。

「……こんにちは、おじさま」

スカートを摘み、膝を折っての一礼と極上の微笑みに、相手はたちまち相好を崩す。その瞳の動きだけが、蛇だった。「私、聞いたんです。おじさまが素敵な『お伽話』を聞かせて下さるって」

『お伽話』という符丁に、その瞳が愉悅の輝きを帯びる。

「なんと、このような天使を我が館にお招きできるとは光栄の極みだよ。お名前は？」

大仰に上げられた腕の中に滑り込むように身を寄せながら。

「……マリア・ノーランド」

はにかむようにして告げたその名に瞳が見開かれた瞬間。ATS34鋼の切っ先が『標的』の最期の鼓動を切り裂いていた。

「おじさま、おじさま……？」

倒れ込むその身体を支えようとするような動きの中で、

標的に致命傷を与えたニューヨーク・スペシャルを隠す。元は刑事の護身用から発したというスタイルのナイフだが、隠すのにそう苦労はない。

「どけ！」

駆け寄った護衛の男達に突き飛ばされ、たたらを踏むように後退る。そのまま、人垣に押し出されるように人の輪の外側へ――

「おい！」

輪の向こう側から男達の怒鳴り声が響いた時には、あたしは従業員用通路へ通じるドアを押し開けていた。

狭い通路にローファーが床を叩く音が反響する。

『標的』には確実に致命傷を与えている。あの場が緊急救命室だろうが替えの心臓まで用意済みの手術室であろうが、救命の見込みは絶対はない。

あとは、ここから脱出――

最後の角を曲がったところで、邪魔者が現れた。護衛の男達と同類の匂いを纏った筋肉ダルマ。裏口から突入してきたらしい。

シッ！

鋭い呼吸だけを発し、男は一気にこちらへ加速してきた。警告も躊躇も一切なく、こちらを「潰しに」くる動き。ど

うやら、その耳にくっついていているイヤーパーイスはプロ仕様に対応しい仕事をしていたらしい。

ここを突破するしかない。

あたしは『翼を拡げる』。

そう形容するのが正しいのかは分からないけど、そうとしか説明のつかない感覚。同時に一気に速度を増した鼓動が、あたしの体感時間を引き伸ばす。

男はやや打点の高いタクトルに移行しようとしている。体配のバランスから、それが奴の『誘い』であることをあたしは見抜いていた。わざと股を潜らせようとして、そのままプレスするつもりだ。

だから、あたしはその誘いにハマったようにスライディングをかけるフリをして――その眼前で、跳んだ。『翼を拡げた』あたしの意識と感覚は、自らの身体制御と、相手の身体制御の見極めを同時に行っている。

刹那の交錯。

置き土産とばかりに、あたしはローファーの踵を奴の背中――背筋を貫く重心の一点に踏み落とした。体幹のバランスを喪った巨体は、受け身の取れないヘッドスライディングに甘んじるしかない。それでダメージを与えられるわけではないが、一度崩したバランスと姿勢は力任せでは回復できない。立ち直るまでの数瞬さえ稼げれば――

がしり。

予期しない異様な感触。踏み落としたローファアの踵が、後ろ手に掴まれていた。受け身も何も投げ出して、この一瞬で無理矢理掴みにきたのだ。大した判断力だ。

あたしは蹴り出す勢いのままにローファアを躊躇いなく脱ぎ捨てる。一回転して着地するあたしの背中を、巨体が床に叩きつけられた振動が震わせた。

裏口から路地裏へ。

「零時はとっくに回ってるのよ！ カボチャの馬車は何処で油売ってるの!？」

「V8を讀えよ！」

聞き慣れた排気音とともに、見慣れた深紅のボディが路地の出口に滑り込んでくる。

躊躇なく、開きっぱなしのウインドウに頭から飛び込むあたしの背後で、最初の銃声が響いた。

「問題は!？」

次々とシフトをかち上げながら、ジャック——あたしの相棒——がエンジン音に負けないように叫ぶ。あたしは汚れた靴下だけになった右脚を指差した。

「ガラスの靴を落としたわ！ 王子様が迎えに来たら追いつ返して」

「自分でやれ！ もうお出ましだ！」

「それでも保護者!？」

あたしはシートの下から自分の得物を引っ張り出す。PDRG、プロトタイプ止まりだったデザインを元に在野のガンズミスが仕上げたシロモノだ。ホロサイトを起動し、排莖方向が左になっていることを確認する。助手席の窓から身を乗り出して振り返ると、こちらに追いつがろうと急加速してくるベントツに照準した。

トリガーコントロールでのショートバースト。

「畜生、ランフラットね」

小口径とはいえ、軍用のライフル弾ミサイルに貫かれてもパンクどころか車速さえロクに落ちない。これだから金持ちとは、と毒づきながら、あたしはラジエーターグリル、ドライバーと次々に撃ち込むが、ことごとく止められる。ならば、と残りの全弾でフロントウインドウをヒビで真っ白にしてやるが、何処かにモニターでも仕込んであるのか、ドライバーが顔を出しさえせずに追いつがってくる。

「ああもう！ 対物ライフルとか対戦車ロケットとかないの!？」

「積んどるか！ んなもん！」

「こうなったら——」

弾倉を交換しながら周囲に目を走らせたあたしに、

「一般車は巻き込むな！」

「じゃあどうすんのよ！」

「撃たれなきゃいい！ 連中の頭を抑えろ！」

「わーったわよ！」

ただ一発で、あたしはベンツのリアウインドウから突き出されたSMGを撃ち飛ばす。

ハイウェイとはいえ、一般車を躲しながらでは逃げ切れまい。何としても足を止めて、応援で揉み潰す……そんなところか。並んだ瞬間、ベンツは躊躇なく体当たりに来た。狙いは左リア。

「そいつを待ってたぜ！」

ジャックの歓声。

さっき『翼を上げた』あたしの感覚の余波が、辛うじてその挙動を捉える。

71年型コルベット・ステイングレイは、ベンツの体当たりを、いなした。

「ワザマエ！」

謎の叫びと共に制御されたハーフスピンで体当たりを躲しながらの一回転で、ぴたりとポジションを入れ替える。

「お次はマッチョのタックルを喰らいな！」

V8エンジンの咆吼がひときわ高まり、コルベットのアイ

アンバンパーがベンツの左リアを押し出す。斜めになりかけたところで、すでに撃ち抜かれて挙動のバランスが崩れた右フロントが限界を超えた。完全に制御を喪ったスピン状態に陥ったところに、一般車が接触する。クラッシュ。

『一般車は巻き込むな』って言わなかった？』

「あれは不幸な交通事故だ！」

悪びれずに嘯くと、ジャックはアクセルを踏み込む。

「さあ、逃げ切るぞ！」

緑と墓石の白だけが色彩をなす静謐な地で。

「ありがとう。ありがとう……ッ！」

あたしの手を押し頂いて号泣する人の好きそうなおじさんに、あたしは何とも困り果てていた。

『標的』はまあ、一言でいえば、21世紀に蘇ったラヴレンチー・パーヴロヴィチ・ベリヤだった。は？ ベリヤを知らない？ ググれ、カス。あたしは世の中の大概のことをグーグル先生に教えてもらった。

……こういうの、海外の古いドラマで見たような気がする。

『晴らせぬ恨みを晴らす闇の稼業』、だっけ……」

普段の仕事で、ここまでの荒事になることはあまりない。賞金稼ぎでさえ、「生死を問わず」<sup>Life or Death</sup>なんて条件が付くよう

な時代ではないのだから。

泳がせた視線が真新しい墓石の銘を捉える。

(これで良かったのかしらね、マリア・ノーランド)

噎び泣くおじさんの頭に空いた掌を乗せながら、あたしは口の中だけでそう呟くのだった。

\* \* \*

駐車場の片隅に駐まった深紅のコルベットに、男が足早に歩み寄る。車内から男を迎えるのは間延びした声。

「流石にトップニュースだな。揉み消せるのか？」

「まあ、何とかするだろう。奴の性癖は、これ以上政権に飼っておくにはおイタが過ぎた」

「そこら中のキリスト坊主共が震え上がりそうなお言葉だ」

「そっちの問題はそっちの問題だ。ウチの会社も暇じゃない」

ジャックの旧友、ジョニーは懐から取り出した封筒を車内に差し入れた。

「依頼のIDだ。先年月日を巻き戻してある」

「サンクス」

掌中のカードの枠内で彼女が微笑む。リエル・サースト  
ン。2007年4月1日生。

「……言いたくないがな、ジャック」

開いたウインドウ越しに、覗き込むように目を合わせる。

5 「これは何の解決にもならんぞ。いずれは……」

「……分かってる」

食いしばった歯の間から絞り出すような、一言。

「分かってるんだよ」

彼女——リエルが戻ってきたのはその時だった。開け放ったコルベットのナビシートに尻から飛び込むと、叩きつけるようにドアを閉める。

「ちよつと、辛気臭い話はもう終わったんでしょうね!?

あたしもういい加減飢え死にしそうなんだけど!」

「……じゃあな」

V8エンジンを始動したコルベットの身震いが、男達の会話を断ち切った。

微かなホイールスピンにその心中を吐き出すようにして走り去るコルベット。そのテールランプを見送りながら、ジョニーは呟いた。

「時間は、もういくらも残っていないぞ……」

「デイナーは何にする?」

「一仕事終わったからな。アメリカズまで足を延ばすか。食  
い放題だ」

「やた!」

にしし、と笑うリエルの満面の笑顔の気配を感じながら、

ジャックはコルベットを猛然と加速させた。

---

---

リエル・サーストン (Riel "Seraph" Thurston)

発行日 : 2019年8月23日

著者 : 西園寺 真之

本文書の無断複製・無断複写を禁じます。

---

---